

上田市文化財調査報告書第127集

西畑道下遺跡

平成28(2016)年度社会資本整備総合交付金(広域連帯)工事

(主)別所丸子線上田市柳沢に伴う西畑道下遺跡発掘調査報告書

2017. 3

長野県上田建設事務所

上 田 市

上田市教育委員会

上田市文化財調査報告書第127集

西畑道下遺跡

平成28(2016)年度社会資本整備総合交付金(広域連帯)工事

(主)別所丸子線上田市柳沢に伴う西畑道下遺跡発掘調査報告書

2017. 3

長野県上田建設事務所

上田 市

上田市教育委員会

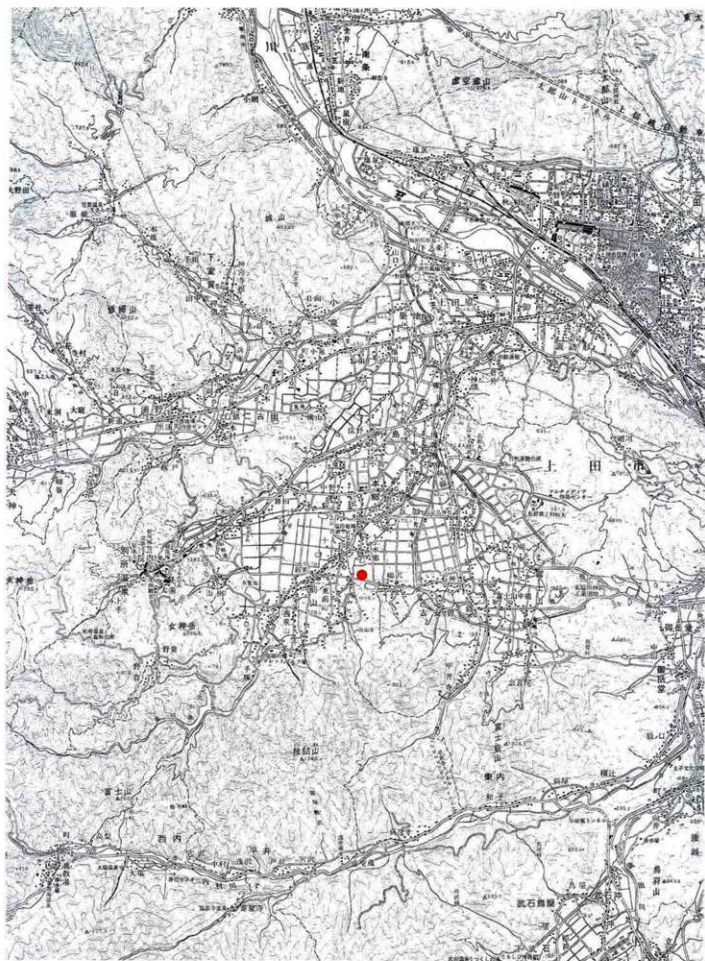
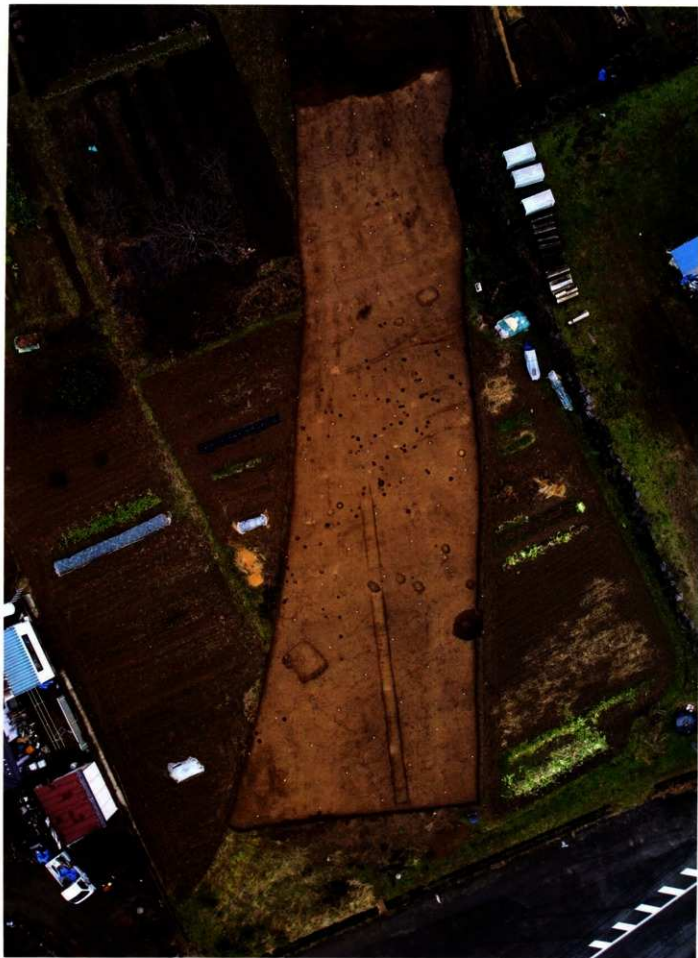


図1 西畑道下道跡位置図 (1/50000)



図2 西畑道下道跡位置図 (1/2500)



PL1 西畑道下遺跡航空写真 (写真上が北)



PL.2 西畑道下遺跡航空写真（写真上が南東 / 写真上方に手洗池）



PL.3 西畑道下遺跡立地（北から / 左手に独結山、右手に女神岳）



PL.4 西畑道下遺跡航空写真（南西から / 塩田平と小牧山）



PL.5 西畑道下遺跡航空写真（西から / 写真右に手洗池）

例 言

- 1 本書は、長野県上田市古安曾に所在する西畑道下遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、長野県上田建設事務所の委託により、上田市が実施した。調査及び調査に係る事務は、上田市教育委員会事務局文化振興課が行った。
- 3 現地調査は、平成 28（2016）年 11 月 10 日から平成 12 月 16 日にかけて実施し、整理・報告書作成作業は、平成 29（2017）年 3 月まで断続的に実施した。
- 4 基準・水準点設置、メッシュ（グリッド）設置に係る各種測量、空中写真測量及び空中写真撮影は、共栄測量設計株式会社上田支店に委託して実施した。また、遺構のセクション等の実測作業は、饗場奈那江・石合好江・長谷川峰子・山本万里が行った。
- 5 整理・報告書作成作業は、饗場奈那江・石合好江・長谷川峰子・山本万里が行った。
- 6 本書に使用した写真は、主に中沢徳士が撮影し、航空写真は委託業者が撮影したものを使用した。
- 7 本書の編集は中沢が行った。
- 8 本調査に係る資料は上田市教育委員会の責任下に、上田市立信濃国分寺資料館に保管している。
- 9 作業員の皆さん

饗場奈那江、新井邦雄、石合好江、川上京子、川上恒生、久保田隆、関大子、竹内和好、田中八枝子、中村真理子、長谷川峰子、宮沢秀昭、村松秋恵、山本万里、若林政一

凡 例

遺構

- 1 実測図については、国家座標の北を頁の上とし、例外は方位を示した。
- 2 縮尺は、原則として原図 1/20 に 1/3 縮小をかけて 1/60 とした。
- 3 レベルの標記はすべて海拔高（単位：m）である。
- 4 遺構観察表の長さの単位は m で、主軸方位は国家座標の北からの角度で示した。
- 5 土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色彩監修の『新版標準土色帖』1990 を用いて判別した。
- 6 遺構写真の縮尺は任意である。

遺物

- 1 実測図は、原則として原図 1/1 に 1/3 縮小をかけて 1/3 とした。
- 2 遺物観察表の「胎」は胎土を、「焼」は焼成を、「色」は色調を示し、色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色彩監修の『新版標準土色帖』1990 を用いて判別した。法量の単位はすべて cm である。
- 3 写真の縮尺は任意である。

調査の体制

調査は、上田市教育委員会事務局文化振興課が実施した。その体制は次のとおりである。
（教育長） 小林一雄 （教育次長） 中村栄孝 （文化振興課長） 浅野之宏 （文化財保護担当係長） 塩崎幸夫・和根崎剛 （文化財保護係／調査担当） 中沢徳士・滝沢敬一・松崎訓央

目 次

本文目次

序	
調査位置図/巻頭写真	
例言/凡例/調査の体制	
目次	
第一章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法	1
第3節 調査の経過と調査日誌（抄）	1
第二章 遺跡の環境	3
第1節 自然的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第三章 調査の結果	8
1 遺構	8
2 遺物	14
写真図版	15
報告書抄録/奥付	18

図版目次

図1 西畑道下遺跡位置図(1/50000)	
図2 西畑道下遺跡位置図(1/2500)	
図3 上田市の最高・最低気温、平均気温の年変化、太陽高度の年変化グラフ	3
図4 上田盆地の地形区分(上)及び地形断面図(下)	4
図5 西畑道下遺跡周辺遺跡分布図	7
図6 上田盆地の地形区分(上)及び地形断面図(下)	6
図7 遺構全体図	8
図8 遺構実測図1	9
図9 遺構実測図2	10
図10 遺構実測図3	11
図11 遺構実測図3	12
図12 遺構実測図5	13
図13 遺物実測図	14

表目次

表1 西畑道下遺跡周辺遺跡分布図	7
表2 西畑道下遺跡出土遺物観察表	14

写真図版目次

巻頭カラー

- PL.1 西畑道下遺跡航空写真 (写真上から北)
PL.2 西畑道下遺跡航空写真 (写真上から南東/写真上方に手洗池)
PL.3 西畑道下遺跡立地 (北から/左手に独站山、右手に女神岳)
PL.4 西畑道下遺跡航空写真 (南西から/塩田平と小牧山)
PL.5 西畑道下遺跡航空写真 (西から/写真右に手洗池)

調査日誌写真

- | | | |
|--------------------------|-------|---|
| PL.6 H28,11,10調査地の耕作土を剥く | | 3 |
| PL.7 H28,11,22遺構検出作業 | | 3 |
| PL.8 H28,11,30遺構掘上げ | | 3 |
| PL.9 H28,12,9遺構実測 | | 3 |
| PL.10 H28,12,13遺構掘上げ | | 3 |
| PL.11 H28,12,15現地説明会 | | |

本文写真

- | | | |
|------------------|-------|----|
| PL.12 SK-02出土遺物1 | | 14 |
| PL.13 SK-02出土遺物2 | | 14 |
| PL.14 SK-02出土遺物3 | | 14 |

写真図版

- | | | |
|------------------------|-------|----|
| PL.15 西畑道下遺跡SK-01 | | 15 |
| PL.16 西畑道下遺跡SK-02 | | 15 |
| PL.17 西畑道下遺跡SK-03 | | 16 |
| PL.18 西畑道下遺跡中央部SDほか | | 16 |
| PL.19 西畑道下遺跡中央部SDほか | | 17 |
| PL.20 西畑道下遺跡航空写真 (東から) | | 17 |

第一章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

平成27年、長野県上田建設事務所(以下「長野県」という。)から、上田市古安曾地区における「社会資本整備総合交付金(広域連帯)工事(主)別所丸子線 上田市柳沢」(以下「工事」という。)の計画策定に伴い、施工地区内に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地「西畑道下遺跡」の保護について協議があった。西畑道下遺跡は、「上田市の原始・古代文化」(1974 上田市教育委員会)によれば、『手洗池西北方の道路沿いの畑地Kにあり、およそ5,000㎡にわたって、縄文期の石鏃および弥生後期の箱清水式土器が出土している。』とあり、事務局では、平成27年6月25日、施工範囲内(図2 朱塗範囲)において西畑道下遺跡の範囲確認の試掘調査を実施した。

試掘調査は工事予定地に、幅約1mのトレンチ30m入れて実施したところ、トレンチの中央から北側、GL-40cmにビット7基が検出された。遺物の出土はなく、遺構の密度も低いと、遺跡の東端にあたると思われた。この結果に基づき、平成28年度に遺跡の記録保存の発掘調査を実施する運びとなった。

調査は、総事業費2,500千円で、長野県からの委託事業として実施した。

第2節 調査の方法

1. 遺跡名と略記号

遺跡の主体部は「字池下」であり、一部が「字西畑道下」にかかるが、『上田市の原始・古代文化』に基づき、遺跡名は「西畑道下遺跡」とし、今回の調査では、「西畑道下遺跡」の略号として「NHM」を付した。現地調査では、国家座標に基づくメッシュによって位置を設定し、各種の記録や遺物の注記等に用いた。

2. 調査区の設定

調査区域は、施工により破壊される範囲の記録保存を目的として設定した。3. グリッドの設定
各種の現地平面測量には、メッシュ番号が用いられている。また、グリッド番号は、北東の交点のメッシュ番号を用い、遺物の取り上げに用いた。

4. 遺構測量

遺構の平面測量は、前述のメッシュを基準に1/20縮尺で行った。また、現地調査終了時には、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量も行っている。断面図や土層図は手取りによるものである。

5. 遺構の掘上げ

現地調査における表土の除去は、主に重機によって行い、その後遺構検出作業、遺構掘上げ作業はすべて人力で行った。

第3節 調査の経過と調査日誌(抄)

1 調査の経過

調査は、11月10日に着手した。最初に、耕作土をバックホーで剥ぎ、クローラダンプに載せ、調査区域外にまとめて搬出した。その後、作業員により遺構検出作業、メッシュ張り、遺構掘上げ、実測作業と進み、12月14日に遺跡の航空写真測量を実施し、同17日に現場撤収した。

その後、遺構図の整理とトレース、遺物の洗浄・注記、実測、トレース作業を行い、報告書の執筆・編集作業を行い、3月に本報告書を刊行して調査作業は終了した。

2 調査日誌(抄)

11/10(木) バックホーにより調査区の表土を剥ぎ、クローラードンプで運んでまとめる。

11/14(月) 重機による表土剥ぎ終了。

11/22(火) 作業員により、遺構検出作業に取りかかる。11/30(水) 遺構検出作業がほぼ終了し、遺構の掘上げに取りかかる。

12/9(水) 土層、遺構セクション等の実測作業を行う。

12/13(火) 遺構清掃を終了し、調査区東の土坑を掘上げる。

12/14(火) ラジコンヘリによる航空写真測量を行う。

12/15(水) 現地説明会を開催する。参加約20人

12/16(金) 発掘機材等を撤収する。



PL.6 H28,11,10 調査地の耕作土を剥ぐ



PL.9 H28,12,9 遺構実測



PL.7 H28,11,22 遺構検出作業



PL.10 H28,12,13 遺構掘上げ



PL.8 H28,11,30 遺構掘上げ



PL.11 H28,12,15 現地説明会

第二章 遺跡の環境

第1節 自然的環境

1 上田の気候

長野県は本州中央部に位置し、周囲を山に囲まれている。このため上田の気候には内陸性の特徴がみられる。夏には日中の気温は東京よりも高温になることが多いが、乾燥しており、夕方から明け方までは気温が下がるためのぎやすい。冬期間には長野県内でも県北部に比べて上田・佐久は降水量が少なく、太平洋側気象区の特徴を示している。

上田市の年間平均気温は12.1℃で、県下では飯田地方に次いで暖かい。気温の年較差は25.8℃で札幌の数値に近く、寒暖の差が大きい。市内でも場所による気温の差が大きい、市街地が最低、最高気温ともに最も高い。年平均湿度は66%で、東京などと並んで全国でも最も低い類に入る。

上田では平均年間降水量が878.7mmと1,000mmに達せず、全国的に見ても雨の少ない土地である。これは海からの湿った空気が周囲の高山に遮られて雨や雪を降らせ、上田上空に達するまでに乾燥した空気になってしまうためである。降雨は年間を通じて少ないのが特徴である。市内では山に近い地域ほど雨が多いが、平地では塩田平に比べて千曲川右岸の降水量が少ない傾向がある。

冬季は西西南と東の風が多く、夏には南東の風が卓越風である。年間を通じて北および南からの風が大変に少なく、東や西の風が多い特徴がある。これは地形の影響によるもので、南と北に山が連なり、千曲川に沿った東西方向に風が吹き抜けるためである。

日照時間が長いのも上田の特徴で、年間2000時間以上というのは長野県下のみならず、全国的にも高い数値である。快晴日数の平均は年80日前後に達する。

2 上田の地形と地質

上田は盆地状の地形で、周囲を独鈞山・大林山・太郎山といった標高1200～1300m級の山々に囲まれている。千曲川は市内で標高465mから417mまで流れ下り、この右岸に中心市街地が広がっている。また、左岸側では、海拔450～500mほどの塩田平が水田地帯を形成している。塩田平には寡雨に備えた灌漑用の溜池が多く見られる。

上田市を東西に流れる千曲川は奥秩父の甲武信ヶ岳付近を水源とし、長野県土の北半を貫いて新潟県に入ると信濃川と名を変え、日本海に注ぐ全長367kmの日本一の大河である。上田市内でこれに注ぐ主な支流としては、右岸から神川・矢出沢川などがあり、左岸からは塩田平を流れる産川水系が浦野川に合流している。千曲川の市内中心部での川原は幅400-600mにわたって広がる。

上田地域の地層は海成層の上に湖成層があつて、さらに約1万年前頃からは湿地性や扇状地の堆積物が形成した地層がある。これに火山に由来する貫入層や堆積物が加わり、市内でも地域によって多様な地質が分布している。古い時代の地層は山地に見られ、太郎山などに産する緑色凝灰岩は古くから礎石などの建材として利用されてきた。上田でとりわけ特徴的なのは千曲川流域に発達している階段状の地形で、これには河岸段丘の段丘崖と断層で形成された断層崖とがある。また、扇状地地形は山を下った急流が緩斜面に出る山際に形成され、大小さ

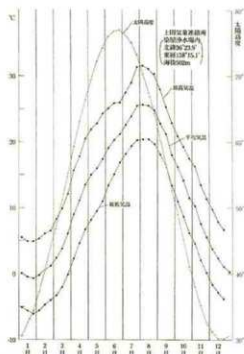


図3 上田市の最高・最低気温、平均気温の年変化、太陽高度の年変化グラフ

まざまに見られる。

盆地内の地層や地形は、おもに第四期(170 万年前まで)に形成された。厚く堆積した湖成層のほか、川や谷の底を埋めて堆積した染屋層が広く分布しているが、このうち千曲川に沿った地域が断層によって落ち込み、段丘状の崖地形が形成されている。

3 西畑道下遺跡周辺の地形と地質

西畑道下遺跡は上田市西部の独鈞山北麓、通称塩田平の南側に位置している。周囲は西方に夫神岳、女神岳、南方に独鈞山をはじめとする山々が屹立している。基盤は新生代第三紀の別所層・青木層・小川層と考えられ、この上部に第四紀更新世の泥岩・砂岩・礫岩から成る上小(じょうしょう)湖成層が堆積している。このことから、堆積当時の塩田平は湖沼であったことがうかがえる。現在は平野部を産川、湯川、尾根川等の小河川が流れているが、いずれも水源となる周囲の山系が浅いため水量に乏しい。また、当地方は寒暖の差が大きく、年間降水量の少ない内陸性気候を呈するため、塩田平では水を確保する必要上、古くから溜め池が築かれてきた。

今回調査を行った西畑道下遺跡は、産川支流で独鈞山に水源を持つ神戸川が形成した扇状地の末端に立地する。平野部が保水力の強い粘土質の土壌であるのに対し、本遺跡地は水はけの良い砂礫質土壌の上にある。

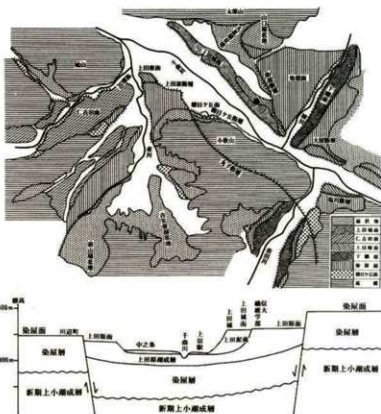


図4 上田盆地の地形区分(上)及び地形断面図(下)

第2節 歴史的環境

1 先史～縄文時代

上田盆地周辺に人の居住が始まったのは、およそ2万年前頃と考えられている。この時代の遺跡は菅平高原や和田峠周辺などの高地に集中して分布するが、塩田平などの平坦地でも人の活動を示唆するような遺物の発見が徐々にみられるようになってきている。

縄文時代になると、山裾の扇状地が主要な生活の場となっているほか、河岸段丘の縁辺部も盛んに利用されている。これに対して河岸段丘の内部や氾濫原の沖積地には縄文人の活動痕跡は見られない。千曲川右岸の一帯は、染屋面にも上田城面にも縄文遺跡はわずかしこ発見されておらず、左岸側やその他の支流域とはやや異なる様相を示している。

西畑道下遺跡が所在する塩田平では、西前山で流紋岩製の有舌尖頭器が1点採集されている。縄文時代早期では茅山式土器を出土した別所温泉の塩水遺跡・比蘭樹遺跡が知られている。前期の遺跡としては別所の北浦遺跡、前山地区の神戸遺跡、1985年の調査で諸磯c式期の土器・住居跡を検出した手塚地区の五反田・堰口ノ遺跡がある。中期になると産川兩岸の手塚・前山・新町・十人・本郷・五加の各地区に遺跡が見られる。そのうち代表的なものは新町地区の検田見遺跡(1961年調査)で、中期中葉勝坂式期に属する土器を中心に、中期後葉の加曾利E式期に属する遺物、竪穴住居跡などが出土した。後期では五加地区で梨の木遺跡から堀之内式期の

遺物が出土したほか、富士山地区の上大郷遺跡(1993 年調査)から4軒の竪穴住居跡・敷石住居跡が確認されている。晩期から弥生時代前期に至る時期においては宮の前遺跡(1992,93 年調査)で土坑に伴う氷式土器の壺が出土している。

2 弥生時代

千曲川流域では、弥生時代の中期後半から長野地方や佐久地方などで大規模な集落が営まれるようになった。上田地方ではこれより遅れ、弥生時代の後期後半から終末期にかけて集落遺跡が出現し、全域に分布する。上田の弥生時代における集落の立地は、河岸段丘上や自然堤防など冠水しにくく、水田に適した低湿地を近くに伴う場所がおもに選ばれている。塩田平の産川流域などが最も利用されており、千曲川右岸でも上田城面に遺跡が分布している。集落は数軒を単位とする小規模なものがほとんどだが、居住域以外を含めた全体像が明らかになった例はまだなく、実態には不明な点も多い。

千曲川右岸の段丘上に位置する弥生遺跡としては、国分寺周辺遺跡群や常入遺跡群などが市街地の東方にある。常入遺跡群に含まれる下町田遺跡は弥生時代後期後半から古墳時代初期にかけての集落遺跡で、90軒の密集した竪穴住居と大量の遺物が出土している。また、上田原遺跡における周溝墓のように地域の有力者の存在を窺わせる発見などから、上田小県地方がこのころ一つの勢力圏を形成しつつあったと想像する見方もある。

本遺跡周辺では、産川流域をはじめとする中小河川の河岸段丘や自然堤防上に立地するものが多く、産川沿いでは梓木遺跡・西光坊遺跡が調査されている。追開沢川沿いの和手遺跡(1982 年調査)では、箱清水式期の住居跡21軒と共に多量の遺物が出土し、良好な資料を提供している。湯川流域ではその支流腰巻川沿いの宮の前遺跡(1992,93 年調査)で後期後半から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡・掘立柱建物跡が確認されている。一方、下之郷集落の東側、尾根川・駒瀬川合流点に立地する天神遺跡(1974 年調査)では竪穴住居跡23件が検出された。また塩田平への入口にあたる浦田遺跡では多量の石包丁とその未製品が発見されている。集落内で製作・使用されていたことを物語るものであり注目される。

3 古墳時代

4世紀後半の大蔵京古墳に始まる上田地方の古墳は、5世紀後半まで方墳のままで、他の千曲川流域のような前方後円墳への変化が大きく遅れる。このことは当地方が中央政権の支配下に置かれるのが他に比べて遅かったことを物語ると考えられている。古墳時代前期の集落は小規模なものが多く、後期には建物が集中して建てられ、大規模なムラが出現する。本遺跡周辺では、林之郷遺跡群や法楽寺遺跡の発掘調査において、後期の集落跡が良好な形で調査されている。古墳を見ると、東信地方で唯一の前方後円墳である二子塚古墳は黄金沢川扇状地の扇央部に位置しており、6世紀前半から中頃の築造と考えられている。上田にある古墳ではこのほかに、帆立貝式の王子塚、円墳の新屋古墳群、下之郷古墳群などが代表的な例として上げられる。

本遺跡が立地する塩田平の古墳時代に当たる遺跡としては、梓木遺跡・西光坊遺跡・宮の前遺跡がある。いずれも弥生時代後期から古墳時代前期にかけて営まれた遺跡であり、東海系のS字状口縁台付・北陸系土器を出土している。またこの古墳時代には塩田平一帯で多くの古墳が築かれている。このうち、銀杏木・宮原遺跡の北、新町の王子神社境内には王子塚古墳がある。南北32.5m、東西34.2m、高さ6mを測り、塩田平最大・最古の帆立貝式古墳(前方後円墳の可能性もある)である。また、産川を挟んで西方には皇子塚古墳があり、径13m、高さ2.5mを測る後期の円墳である。一方、長野大学の北側から東側にかけての小牧山丘陵地には下之郷古墳群がある。後期の群集墳であり、このうち他田塚(おさだづか)古墳・塚原1号墳は発掘調査の結果、6世紀後半に位置づけられている。

4 律令期

大宝律令のもとで信濃国にも国衙が設置され、中央から国司が派遣された。この信濃国府がどこに所在したかは今もって明らかになっていないが、「和名類聚抄」には筑摩郡に在りと記されている。しかし、国府と国分寺

は近接して置かれるのが通例であることから、当初小泉郡に置かれた国府が9世紀頃に筑摩郡に移ったと考えるのが現在の通説となっている。上田における国府の所在地としては、条里的遺構が今も残る神科台地と、常田の信州大学繊維学部敷地周辺に推定されている。信濃の国分寺は、昭和38年から40年代前半の発掘調査によって僧寺跡と尼寺跡が併置して確認され、史跡公園として整備されている。

西畑道下遺跡のある古安曾地区には、古代阿曾氏が奉斎したと伝える安曾神社（祭神は健南方富命、大己貴命、八坂刀女命）がある。また、隣接する下之郷地区には、宮中に祀られている生島神・足島神を祭神とする生島足島神社があり、その本殿には大地に連なる土間があるだけの形式は、古代の様式を伝えるものと考えられている。また、遺跡の北300mには生島足島神社の旧鎮座地といわれる泥宮があり、古代の信仰の色彩が色濃く残る地域である。該期の遺跡には、天神遺跡・梓木遺跡・西光坊遺跡・宮の前遺跡があり、竪穴住居跡・掘立柱建物跡が確認されている。保野地区の中井遺跡でも掘立柱建物跡・井戸跡が検出されている。

5 中世

律令制度が崩壊に向かうと、上田小泉地方でも開発領主の寄進により貴族や寺社が経営する荘園が数多く成立した。「吾妻鏡」によれば当地方には八条院領常田庄や最勝光院領塩田庄など6つの荘園と3ヶ所の牧の名が見られる。この時代には地元に所領を持つ地方武士達が勢力の増大を目指して郡に向かったが、木曾義仲が敗北して源氏の世となると、武士達は鎌倉御家人を指向するようになった。このような武士としては、海野氏、祢津氏、泉氏、浦野氏などが代表的である。

一方、それまで有力者だった塩田氏などは義仲に与したために所領を失う結果になったかとみられる。鎌倉時代の塩田平では幕府の重臣である島津氏、その後は北条氏が地頭職をつとめ、北条義政がここに通世してからは塩田北条氏が三代60年間にわたって仏教文化を花開かせた。今日でも安楽寺三重塔をはじめとする数多くの歴史的建造物、史跡が残されている。なお、国分寺郷は荘園化されることはなく、終始公領であった。

鎌倉幕府が滅亡して信濃から北条氏の勢力が消滅すると、当地方も地方領主による争乱の時代に入る。荘園の消滅と並行して守護と国人領主の対立が激化するなか、塩田城を本拠とする村上氏が支配を伸ばしたが、天文20年に甲斐の武田勢によって攻略された。地土の真田氏は同じ頃に武田に仕えるようになり、次第に頭角を顕わしていったが、武田滅亡後の戦乱を主家を次々と変えることで巧みに切り抜けたことで知られる。天正11年(1583)には上田城の築城を開始し、間もなく小泉郡一円を支配下に収めた。また、現在の市街地の骨格をなす城下町も形成された。真田が上杉に臣属したために徳川から攻められ、関ヶ原合戦でも昌幸・信繁父子が西軍に加わったために上田城は徳川勢の攻撃にさらされたが、よくそれをしのいだ。東軍勝利の後には、真田信之が沼田・小泉を合わせた9万5千石を領して上田城主となり、領域支配を確固たるものにした。

6 近世

徳川幕府の時代には、城主が真田氏から仙石氏、松平氏と代わる中、城下は物資の集散地として栄えた。現在見る上田城はおもに仙石氏の時代に修築されたもので、城下町の整備もこの時期、寛永頃までには概ね完成したようである。上田は城下町であると同時に北国街道の宿駅を兼ねており、流通の拠点であった。様々な産業が育ち、特に上田紬は養蚕とともに大きな発展をみせた。西畑道下遺跡の北西には、真田の上田進出の道となった上州街道(国道144号線)が通る。

7 近現代

西畑道下遺跡のある古安曾地区は、明治8年(1875)に石神村・鈴子村・平井寺村・柳沢村が合併して古安曾村となり、明治22年に下之郷村と合併して東塩田村、昭和24年(1949)に富士山村と合併し、昭和31年(1956)には塩田地区の四か村が合併して塩田町が発足している。昭和45年には塩田町が上田市に編入し、平成となり、昭和33年(1958)に上田市に合併した。その後、平成18年(2006)の市町村合併を経て現在に至っている。

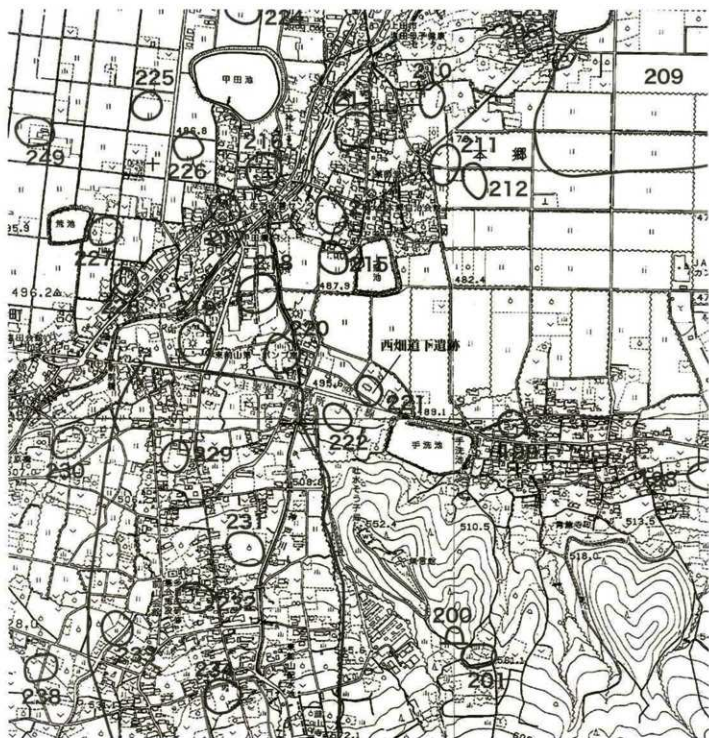


図5 西畑道下道跡周辺道跡分布図

番号	道跡名	所在地	時代	番号	道跡名	所在地	時代	番号	道跡名	所在地	時代
198	東畑道跡	古安曾字東畑	平安	215	仲木道跡	上本郷字仲木	弥生～平安	227	軒民道跡	十人字軒民	縄文～平安
199	下久根道跡	古安曾字下久根	平安	216	下村道跡	十人字下村	弥生～平安	228	検田見道跡	前山字検田見	縄文～平安
200	向山古墳	古安曾字向山	古墳	217	中村道跡	十人字中村	弥生～平安	229	追成道跡	前山字追成	縄文～平安
201	東安曾岡道跡	古安曾字東安曾岡	縄文～平安	218	甲田道跡	前山字甲田	平安	230	箱田道跡	前山字箱田	弥生～平安
206	南在家道跡	五加字南在家	縄文～平安	219	藤の木道跡	前山字藤の木	縄文～平安	231	上神戸道跡	前山字上神戸	縄文～平安
209	五加道跡	五加字水口在家	縄文～平安	220	下城戸道跡	前山字下城戸	縄文～平安	232	立町道跡	前山字立町	縄文～平安
210	長畝道跡	上本郷字長畝	縄文～平安	221	西畑道下道跡	古安曾字西畑道下	縄文・弥生	233	中島道跡	前山字中島	弥生・平安
211	才光坊道跡	上本郷字才光坊	弥生～平安	222	大道上道跡	古安曾字大道上	平安	234	上町道跡	前山字上町	縄文・平安
212	幅合道跡	上本郷字幅合	弥生～平安	224	池の下道跡	十人字池の下	平安	238	入海道道跡	前山字入海道	平安
213	西村道跡	上本郷字西村	縄文	225	古屋敷道跡	十人字古屋敷	縄文・平安	240	玉影道跡	十人字玉影	縄文～平安
214	深沼道跡	上本郷字深沼	縄文～平安	226	前田道跡	十人字前田	平安				

表1 西畑道下道跡周辺道跡分布図

第三章 調査の結果

本調査では、土坑3件、ピット 件、溝跡4条を検出している。遺物の出土量がごくわずかなため、時期の特定は困難であるが、概ね10世紀前後の遺跡と考えられる。

1 遺構

図7は遺構全体図である。遺構は土坑3、溝跡4条ほか多数のピットが検出された。土坑はSK-01とSK-03が墨丸方形を呈している。SK-02は深さ1m以上を計り、頭で示す遺物を出土した。また、ピット群についても並びに規則性は認められない。SK-02を除いては出土遺物がなく性格は不明であり、SK-02についても出土遺物が10世紀前後と思われるだけである。

このように本遺跡は、不明確な点が多く、前後に広がるであろう遺跡全体の解明に待たれる。

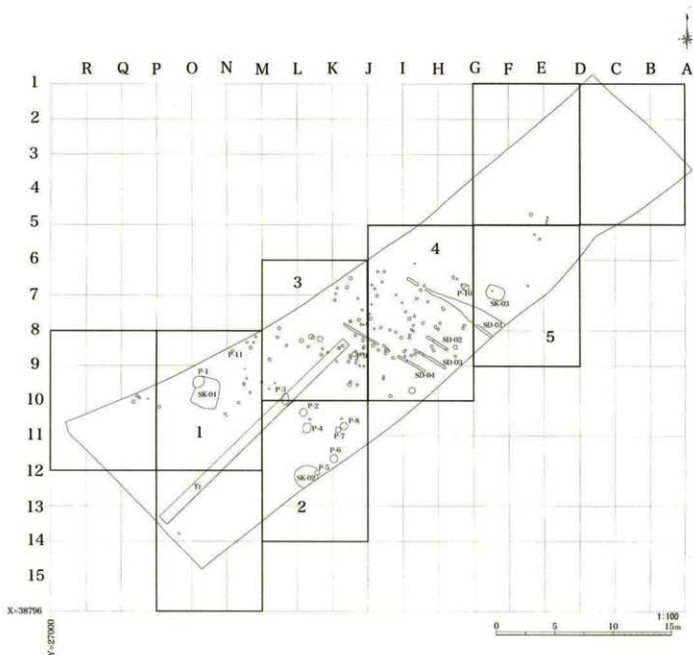


図7 遺構全体図

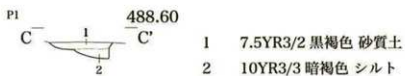
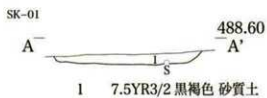
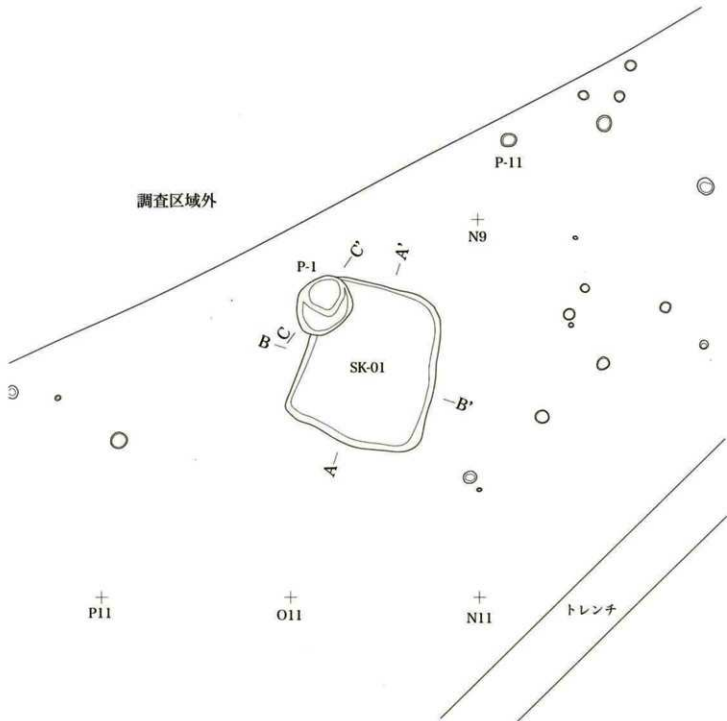
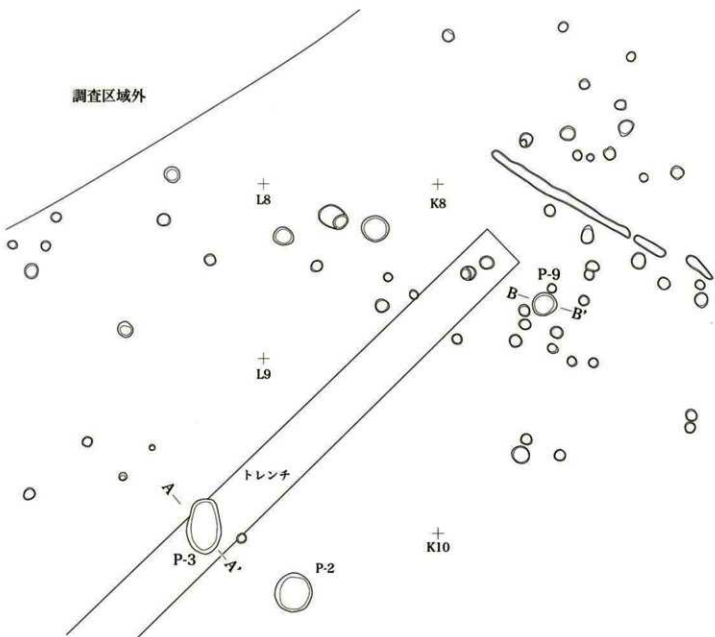


図8 遺構実測図1

調査区域外



1 7.5YR3/1 黒褐色 砂質土



1 10YR2/3 黒褐色 砂質土 (10YR4/4 褐色土混じり)



図 10 遺構実測図 3

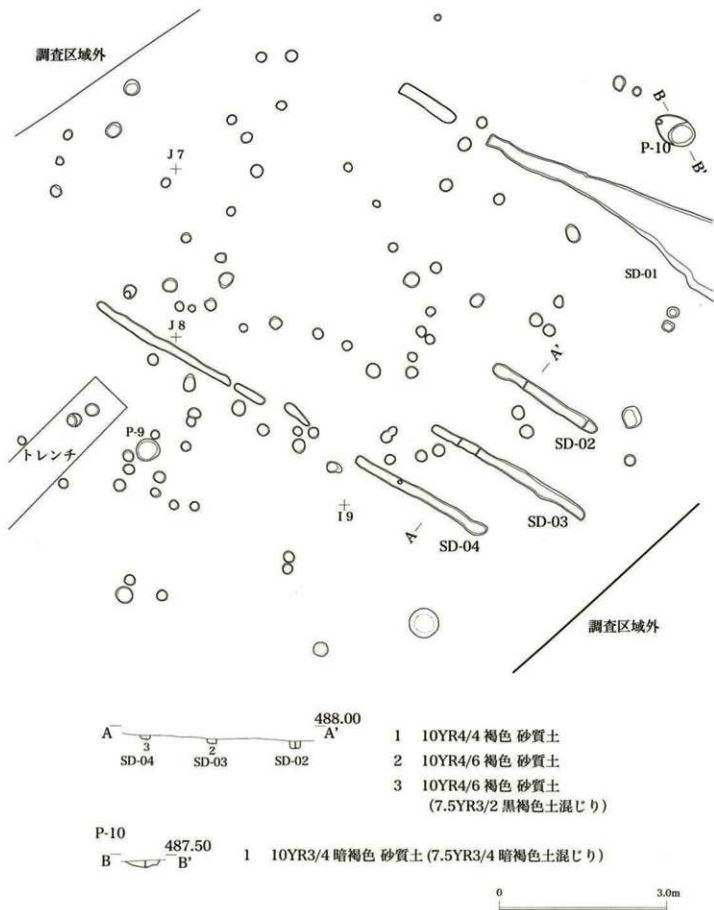
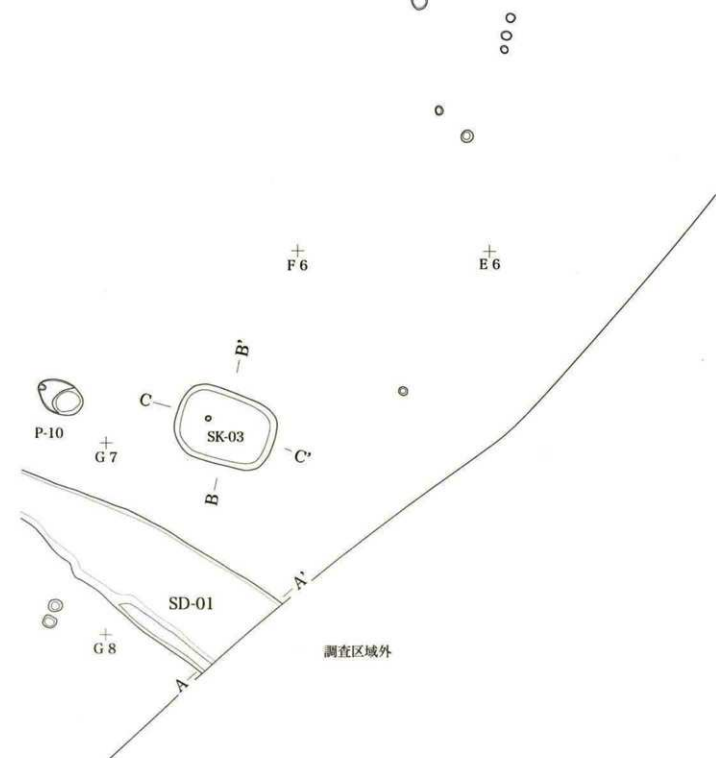
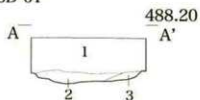


図 11 遺構実測図 4



SD-01



- 1 10YR3/4 暗褐色 (耕作土)
- 2 7.5YR3/4 暗褐色砂質土
- 3 7.5YR4/4 褐色砂質土 (10YR2/3 黒褐色土混じり)

SK-03



- 1 10YR3/4 暗褐色 砂質土 (7.5YR4/4 褐色土混じり)

図 12 遺構実測図 5



2 遺物

出土した遺物で図示できるのは SK-02 から出土した以下の 3 点だけであり、覆土中からの出土遺物であるため、遺跡・遺構の時期を断定するには資料に乏しい。

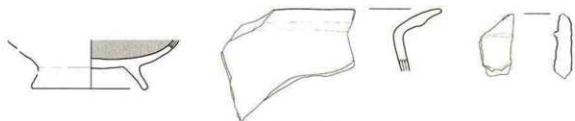


図 13 遺物実測図

No	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	外面色調	内面色調	成形・形態	外面調整	内面調整	備考・特記
1	土師器	埴		3.1	7.2	体部～底部 1/2	白色砂粒、微 砂粒、雲母を 含む	良好	7.5YR6/6褐色	5YR 3/1黒褐色	轆轤成形 付け高台	(体部)轆轤によ る無で(高台 部)横位撫で (底部)回転糸 切り後施調整	轆轤による撫で の残増き 黒色 処理	
2	土師器	甕		4.0		一口縁部～胴部	微砂粒を含む	良好	7.5YR7/6褐色	5YR6/6褐色	轆轤成形 頸部 で「くの字」状に 折れる	(胴部)刷毛状 工具による横位 撫で	横位による撫で	
	種類	名称	長さ	幅	厚さ	重量	備考							
3	ガラス状	不明	3.8	2.0	1.2	12.4								

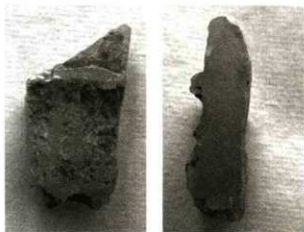
表 2 西畑道下遺跡出土遺物観察表



PL.12 SK-02 出土遺物 1



PL.13 SK-02 出土遺物 2



PL.14 SK-02 出土遺物 3



PL.15 西畑道下遺跡 SK-01



PL.16 西畑道下遺跡 SK-02



PL.17 西畑道下遺跡 SK-03



PL.18 西畑道下遺跡中央部 SD ほか



PL.19 西畑道下遺跡中央部 SD ほか



PL.20 西畑道下遺跡航空写真（東から）

報告書抄録

ふりがな	にしはたみちしたいせき
書名	西畑道下遺跡
副書名	平成28(2016)年度社会資本整備総合交付金(広域連携)工事 (主)別所丸子線上田市柳沢に伴う西畑道下遺跡発掘調査報告書
シリーズ名	上田市文化財調査報告書
シリーズ番号	第127集
編著者名	中沢徳士
編集機関	上田市教育委員会
所在地	〒386-0025 長野県上田市天神一丁目8番1号上田駅前ビルバレイオ5階 TEL0268(23)6362
発行年月日	西暦2017年3月15日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
西畑道下遺跡	長野県上田市古安曽字池下	20203	36° 34° 95°	138° 19° 92°	平成28年11月10日～ 平成28年12月16日	900 m ²	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西畑道下遺跡	包含地	平安時代中期	土坑、ピット、溝跡	土師器坏、碗、甕、	

上田市文化財調査報告書第127集

西畑道下遺跡

平成28(2016)年度社会資本整備総合交付金(広域連携)工事
(主)別所丸子線上田市柳沢に伴う西畑道下遺跡発掘調査報告書

発行日 平成29年3月15日

発行 長野県上田建設事務所・上田市・上田市教育委員会

編集 上田市教育委員会(事務局:文化振興課)

長野県上田市天神一丁目8番1号上田駅前バレイオビル5階

TEL0268(23)6362 FAX0268(23)6375

E-Mail bunka@city.ueda.nagano.jp